

大江町埋蔵文化財調査報告書 第3集

K-692

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書

2000

大江町教育委員会

大江町埋蔵文化財調査報告書 第3集

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書

2000

大江町教育委員会

序

本年度も調査委員の皆様をはじめ、多くの方々のご尽力により「左沢楯山城」の調査が進められました。本年度の調査の概要について、このように立派に報告書としてまとめられましたことに、先ず心から感謝申し上げます。

本年度調査の要点としては、1つに「寺屋敷」跡の発掘調査であります。ただ、これに伴う遺物の出土が少ないのが残念であります。

2つに、城跡全体の縄張図の作成がなされました。この調査は、困難な環境の中ではありますが、本年度は特に大きな進歩を見たとの事であり、そのご苦勞に心から感謝申し上げます。

3つに、航空写真の撮影であります。これにより、寺屋敷の発掘調査の成果等も、より具体的に眺観することが出来たところであります。

いずれにしましても、残暑の中での調査委員の先生方、また終始ご指導下さっている文化庁並びに県文化財課に対し衷心よりお礼申し上げます。本報告書が今後の調査の基礎となり、本調査の充実が図られんことを心から祈念いたします。

大江町教育委員会

教育長 清野 昭一郎



左沢楯山城全景



寺屋敷遺構状況

例 言

1. 調査名 左沢楯山城遺跡発掘調査
2. 調査期間 左沢楯山城遺跡C地区寺屋敷 1999年8月9日～9月6日
左沢楯山城A地区元屋敷 1999年10月29日～11月8日
3. 調査面積 C地区寺屋敷465㎡、A地区元屋敷100㎡
4. 調査体制
 - ・調査主体 山形県大江町教育委員会
 - ・発掘調査指導 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長 川崎 利夫
 - ・執行体制 左沢楯山城遺跡関連調査委員会

顧問	入間田 宣夫	東北大学東北アジア研究センター教授
委員長	伊藤 清郎	山形大学教育学部助教授
副委員長	高山 法彦	大江町文化財保護委員会委員長
事務局長	鈴木 勲	西村山地方事務所青少年専門員
委員	北 畠 教 爾	河北町文化財保護審議会委員
委員	金 山 耕 三	山形県立荒砥高等学校校長
委員	誉 田 慶 信	岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科助教授
委員	大 場 雅 之	財団法人山形県テクノポリス財団
委員	松 田 進	大江町文化財保護委員会副委員長
委員	沓 沢 喜代次	大江町文化財保護委員会委員
委員	犬 飼 安太郎	大江町文化財保護委員会委員
委員	柏 倉 昇	大江町文化財保護委員会委員

- ・事務局 山形県大江町教育委員会社会教育課
課長／伊藤 仁
課長補佐／佐藤 准一
係長／佐藤 光子
主事／日下部 美紀（現場担当）
非常勤／村上 宗紀（現場担当）
- 5. 実測及びトレース 日下部 美紀・小関 幸悦
- 6. 縄張図作成 大場 雅之
- 7. 遺構写真撮影 村上 宗紀
航空写真撮影 アジア航測株式会社
- 8. 本書の執筆 はじめに／鈴木 勲
第1章／川崎 利夫
第2章／犬飼 安太郎
第3章／大場 雅之
第4章／伊藤 清郎
- 9. 現地調査における参加者は下記のとおりである。
大江町高齢者事業団
安全就業指導員 太田 進
作業員 木村政男・松田和雄・佐藤力也・佐竹 啓・新宮金太郎・菊地辰夫・阿部廣志
会田源吉・松田正市・小関幸悦・岩淵正紀・大場恵一・門脇益幸・奥山伸行
- 11. 縄張図調査に伴う矢竹伐採 西村山地方森林組合
- 12. 調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

本文目次

はじめにー左沢楯山城跡の宗教遺跡ー	1
第1章 寺屋敷の発掘調査	4
第1節 遺跡の立地と環境	4
第2節 調査経緯と調査方法	5
第3節 寺屋敷の発掘	7
第4節 出土遺物	11
第2章 元屋敷の試掘調査	12
第1節 遺跡の立地と環境	12
第2節 調査方法と調査経緯	12
第3節 試掘の結果	13
第3章 縄張図調査	14
第1節 B2地区（八幡平周辺）の縄張図	14
第2節 C地区（寺屋敷周辺）の縄張図	17
第4章 成果と課題	18
第1節 今年度調査の成果	18
1. 発掘調査の成果	
2. 縄張調査の成果	
第2節 次年度以降調査の課題	19
1. 発掘調査の課題	
2. 縄張調査の課題	

図版目次

第1図 大江町主要部と遺跡位置図	1
第2図 左沢楯山城遺跡調査概要図	2
第3図 寺屋敷トレンチ・グリッド配置図	4
第4図 寺屋敷主要部遺構配置図	6
第5図 寺屋敷主要部柱穴断面図	7
第6図 寺屋敷遺構配置平面図	10
第7図 『鉄田山巨海院古屋敷図面控』	12
第8図 元屋敷遺跡位置図及びトレンチ配置図	13
第9図 B地区縄張図	15
第10図 C地区縄張図	17

写真目次

写真1 ①北東より寺屋敷を望む	3
②南西より寺屋敷を望む	
写真2 寺屋敷（Dグリッド）発掘調査状況	5
写真3 寺屋敷掘立柱等遺構状況	6
写真4 ①寺屋敷Fトレンチ遺構状況（北東側）	8
②寺屋敷Fトレンチ遺構状況（南西側）	
写真5 ①柱穴検出状況D6P1	9
②柱穴検出状況D7P4	
③柱穴検出状況F P 1 3	
④柱穴検出状況F P 1 5	
⑤柱穴検出状況F P 2 4	
写真6 寺屋敷出土遺物	11
写真7 元屋敷全景	12
写真8 寺屋敷発掘調査状況	19

はじめに - 左沢楯山城跡の宗教遺跡 -

左沢楯山城遺跡関連調査は、これまで発行された調査報告書に見る通り、平成5～7年度の全体調査を踏まえて、同8年度にC地区（本丸）の西曲輪（A～D地区について、P2第2図参照）同9、10年度にB1地区（二の丸）の通称「千畳敷」並びにその西の堀切りと、年次的に縄張図を作成しながら、発掘調査を継続してきた。

その結果、それぞれの曲輪の構造や切岸、柵列・門・堀・建物、それに地下室の跡などが確認され、貴重な成果と新たな課題を得ることができた。

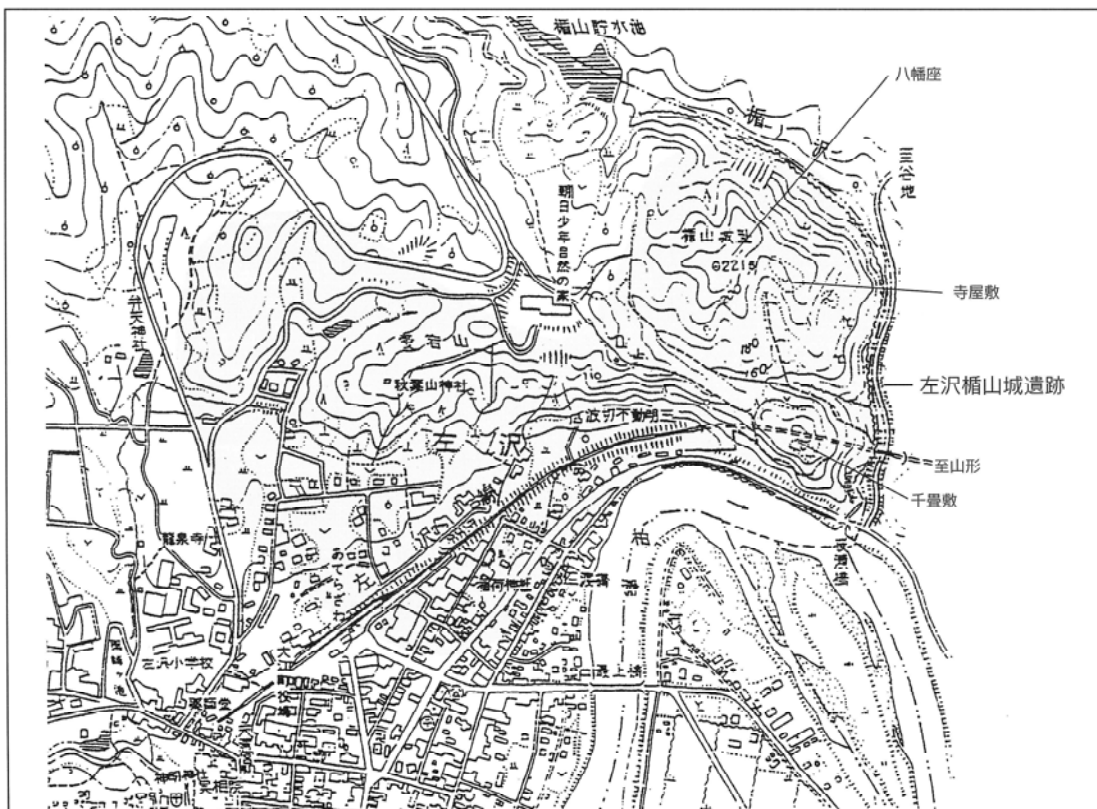
これらを受けて、本年度は、左沢楯山城跡最大の曲輪であるC地区の通称「寺屋敷」の発掘調査を実施することにした。その経過並びに成果と課題は、以下、本報告書が述べる通りであるが、ここでは寺屋敷を中心に、左沢楯山城跡に残る宗教遺跡について、概観しておきたいと思う。

寺屋敷と巨海院 巨海院は古くは柴橋落衣（寒河江市）の北、寺山の大門跡近くにあったといわれている。落衣に接する金谷原に出羽郡司小野良実の廠庁（役所）があり、そこには良実の次女の小野小町が住んでいた。彼女は優れた歌人で、日頃、定朝作虚空蔵菩薩を深く信仰していた。この菩薩が巨海院の旧本尊で、巨海院では護法大士として尊崇してきた、という伝承が残るからである。

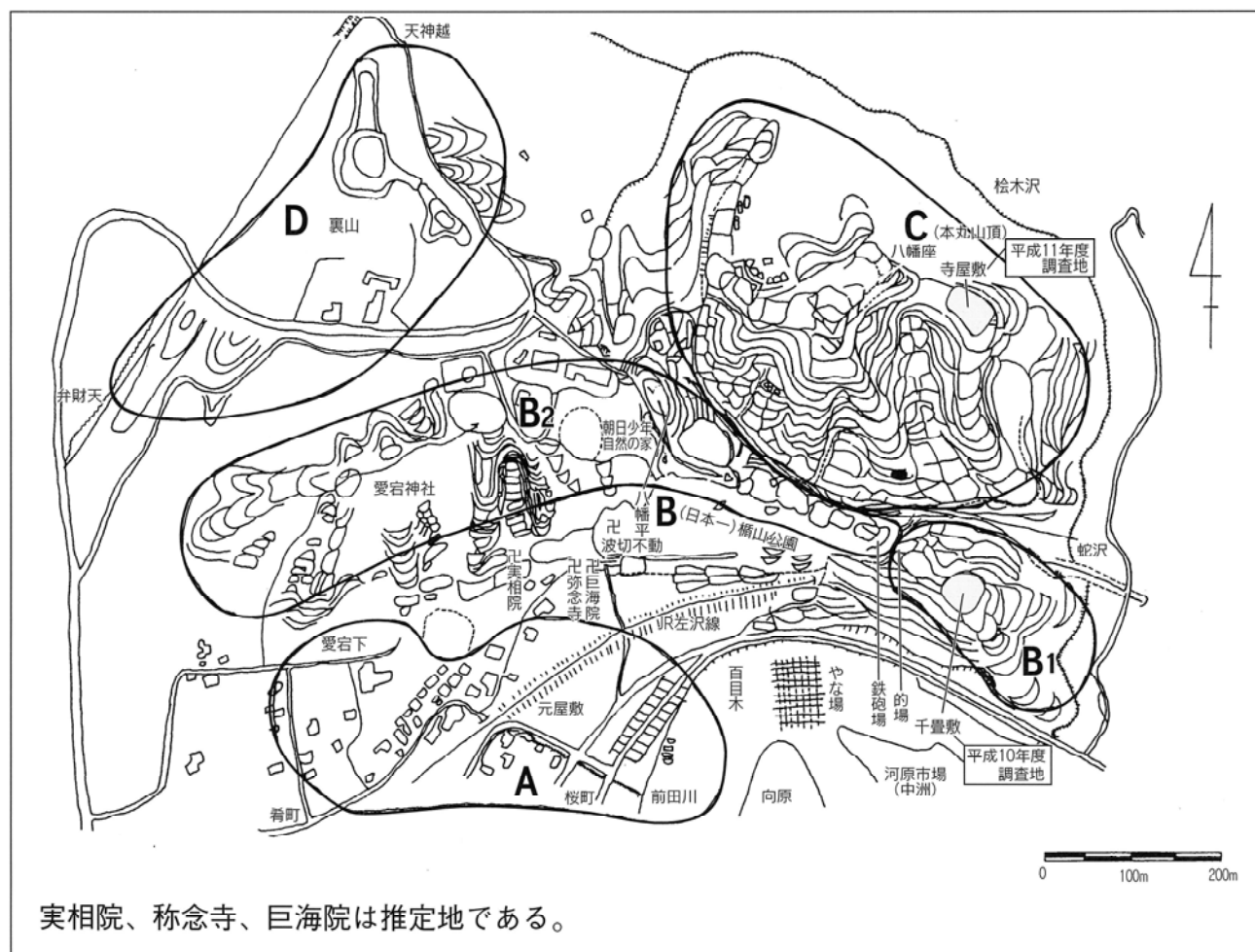
その後、正平年間（1346～70）に至り、左沢元時が楯山城を築くが、その時に巨海院も城中に移されたと考えられる。その場所は、C地区（本丸）の東側、現在、「寺屋敷」と呼ばれる^{ひのきさわ} 檜木沢に面する段丘状の広い平坦地と考えられている。ここは城全体から見れば鬼門近くに位置し、そこに巨海院を配置することにより、城中の祈願寺的な性格を持たせる意図があったと推測されている。

巨海院では、創立を天文11年（1542）、開基を新庄の瑞雲院五世の三光存辰としており、前述したこ

第1図 大江町主要部と遺跡位置図



第2図 左沢楯山城遺跡調査概要図



と年代に違いがあるが、それは天文11年頃に、巨海院が真言宗から曹洞宗に改宗されると共に、城の整備に伴って寺屋敷から城の南山麓に移築されたことを示すものと考えられている。

この頃、すでに、山麓には実相院や称念寺が建ち、波切不動も祀られていたから、そこに巨海院も移すことにより、愛宕山中から元屋敷にかけた山麓一帯を、左沢における信仰の拠点とすることができたものと思われる。

八幡平・八幡座と八幡宮 左沢元時による楯山城築城に際し、巨海院と共に城中に祀られたのが八幡宮である。大江氏一族の元時は、初代親広以来の由緒を持つ寒河江八幡宮の分霊を城中に勧請して、武運長久を祈る守護神としたものであろう。現在も、B2地区(三の丸)に「八幡平」の地名が残ることから、ここに祀ったものと考えられている。

なお、C地区(本丸)の山頂は「八幡座」とも呼ばれるが、それは楯山城が拡張整備された際に、八幡宮も八幡平からここに遷座されたことを示すものと思われる。

天満宮と実相院 実相院は、開基一済法印が那須の立岩村長学密寺に教えを請い、愛宕山中に一字を建立したことに始まるとされる。その後、隆盛となり天文9～10年(1540～41)頃には、長学寺の法流を受け継ぐまでになったといわれている。愛宕山一帯は人々の信仰の山であり、天満宮や愛宕・秋葉の両権現も祀られていたが、実相院はこれらの寺社の別当を勤めていたのである。

また、愛宕山付近を、左沢と吉川(西川町)を結ぶ天神越が通るが、この名は天満宮があったことに由来すると思われる。天満宮は大江氏にかかわる学問神であり、一族の左沢氏も保護崇敬したのは当然であったと考えられる。

民衆の念仏と称念寺 称念寺は創建を永正8年（1511）、開基を真阿上人としている。しかし、藤沢の清浄光寺に残る、『天童仏向寺末寺開基録』では、大永2年（1522）を創建としており、隔たりがある。

この当時の左沢は、最上川舟運の河岸や川漁も盛んで、人々が集まり市も立つ町場的な様相を見せていた。そこに永正8年頃には称名念仏の教えが及んできて、念仏の徒により、楯山城南山麓に一字が建立される。称念寺の山号が大沢山であったのも、たくさんの人々が群集して念仏を称える様に由来するものとされている。

そして、大永2年頃には、一向上人ゆかりの念仏道場である仏向寺と、本末関係を結ぶようになったと考えられている。

以上、楯山城は左沢を守る要害であると共に、信仰の拠り所であったことを概観してきたが、これは寺の縁起や伝承、『宗古録』に基づく点が多い。それを検証し確かな史実とすることが、今回の寺屋敷発掘の大きなねらいと言えるだろう。

写真1 ①北東より寺屋敷を望む



写真1 ②南西より寺屋敷を望む



第1章 寺屋敷の発掘調査

第1節 遺跡の立地と環境

寺屋敷は、左沢楯山城山頂の八幡座（標高215メートル）の東側に位置する。先年発掘調査を行った千畳敷とは蛇沢の深い渓谷を隔てて350メートル北側である。八幡座からは約200メートル東にあり、楯山の東から北へ延びる桧木沢（楯ノ沢）に望む平坦地である。標高167メートル前後で、面積465平方メートルの平場を形成する。東側に開け、桧木沢、楯山配水池、県道大江・寒河江線を隔てて柴橋地区の平野山を望むことができる。

寺屋敷が桧木沢に望む東側には2、3段の細長い曲輪が連なり、背後の西側は山頂より下る尾根に10段にもわたる大小の曲輪が階段状に連なり、南から東へ延びる。正に北、西、南の三方が曲輪群によって囲まれた平坦地で、ここも一つの広い曲輪と見ることができるであろう。

『巨海院由緒』（『大江町史』）によれば、当時真言宗であった鉄圍山巨海院は、前述のとおり落衣（寒河江市）より移されここにあったと言う。それは中世後期と思われるが、楯山が山城として機能していた時期に山城が寺院施設をとり込んで、この地に移建されたことになる。「寺屋敷」という地名は以上のような事情に由来する。

第3図 寺屋敷トレンチ・グリッド配置図

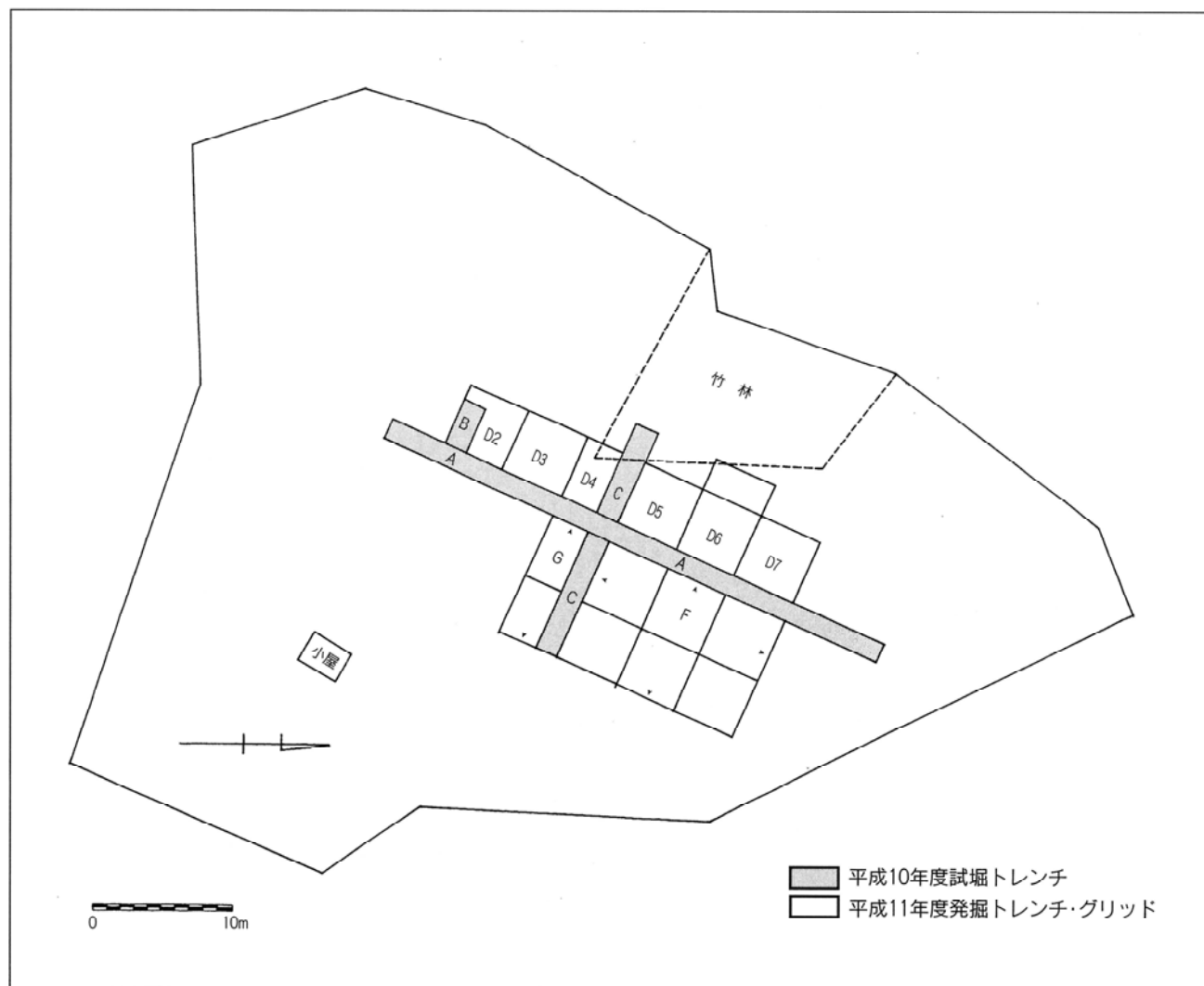


写真2 寺屋敷（Dグリッド）発掘調査状況



第2節 調査経緯と調査方法

「寺屋敷」に果たして遺構が存在するかどうかを確認する目的で1998年10月に、千畳敷の曲輪の発掘が完了した段階で、探査のため小試掘を行った。

それは平坦地の遺跡中心部に南北に幅1.5メートル、長さ35メートル、それと中心部で交差するように東西に幅1.5メートル、長さ15.5メートルのトレンチを設定して試掘に入った。Aトレンチ南側で柱穴らしいピットの発見があったので、両側へ幅1.5メートル、長さ3メートルのBトレンチを設けた。

この調査により地表下40～50センチの岩盤や黄褐色粘質土にくい込む角柱や円柱の掘立柱柱穴が41カ所で検出を見た。それらは径25センチ～40センチ、深さ20～30センチで、岩盤を掘り込んだものもあった。中には同一建物、同一時期に属する掘立柱建物の柱穴もあった（1999年 大江町教育委員会『左沢楯山城遺跡調査報告書』p18～20参照）。

これらの検出状況をもとに掘立柱建物跡がこの地にあったことが判明したので、1999年（平成11年）の夏季における主調査は寺屋敷を対象に行うことになった。

現場での発掘調査は8月9日より9月6日（実働11日）までである。

昨年度設定したAトレンチとCトレンチを中心に、Aトレンチの西側に4メートルの方形をグリッドとする6グリッド（D2～7グリッド）をAトレンチに平行して設け、東側に8×16メートルの8グリッドを設定した。そして両トレンチの交点東側のF区を中心に拡張精査を行った。

D5～D7を含むF区から良好な柱列配置の建物跡が検出されたので、仏堂と思われるその建物跡の検出を中心に調査を進めた。なお、D2～4グリッドからも良好な状態で柱穴が検出されたが、ここにあった建物の規模は明らかでない。今後の拡張精査が望まれる。

発掘調査面積は320平方メートルである。

第4図 寺屋敷主要部遺構配置図

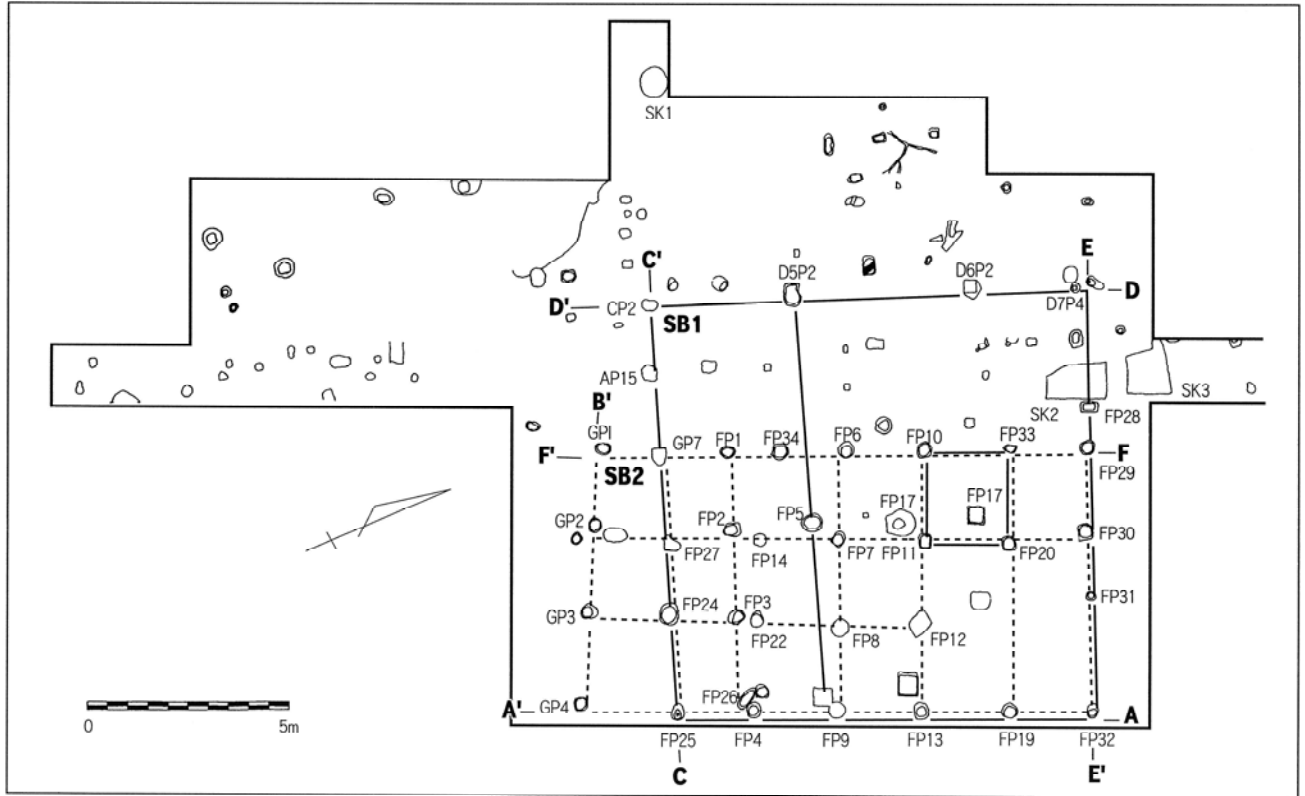
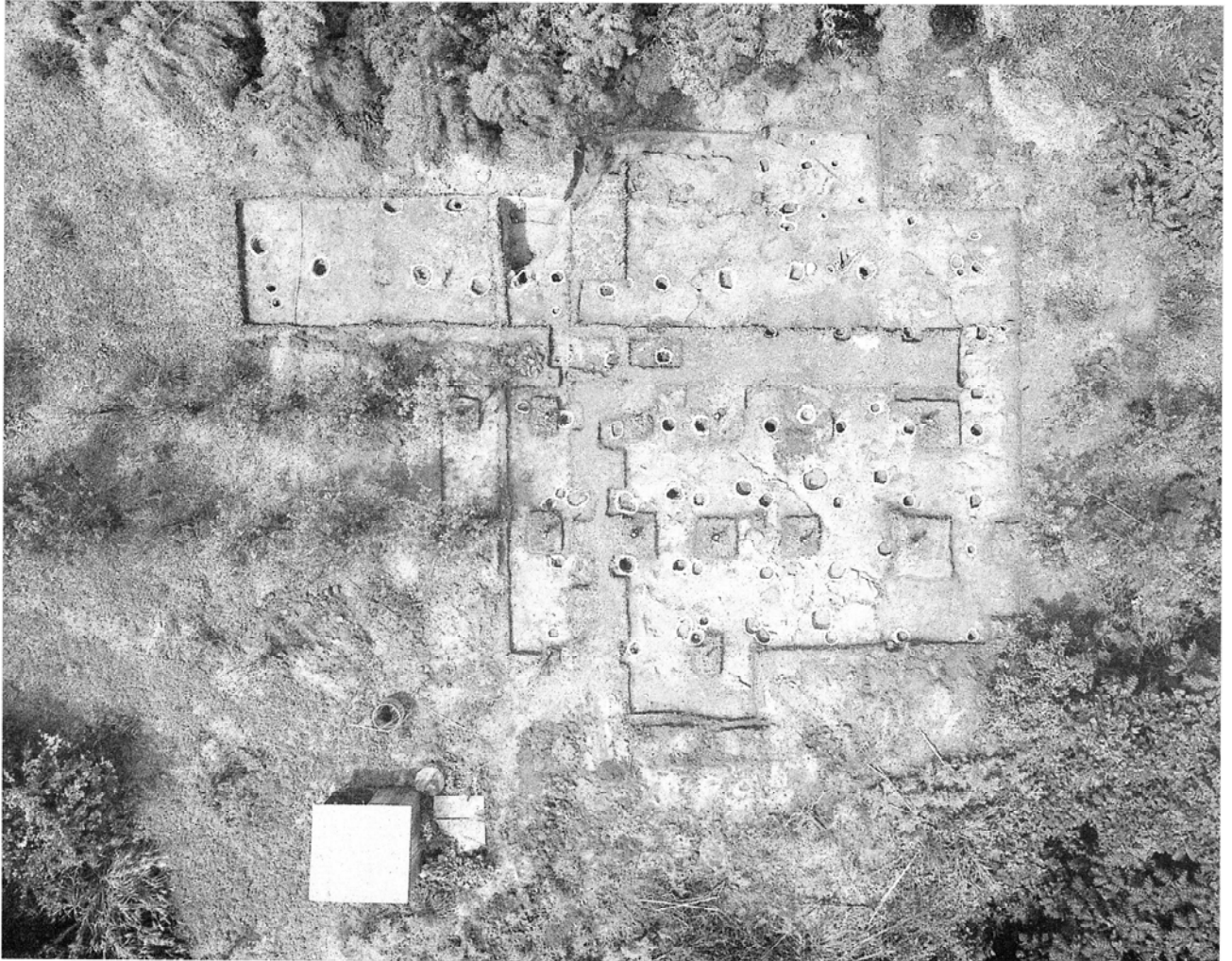


写真3 寺屋敷掘立柱等遺構状況



第3節 寺屋敷の発掘

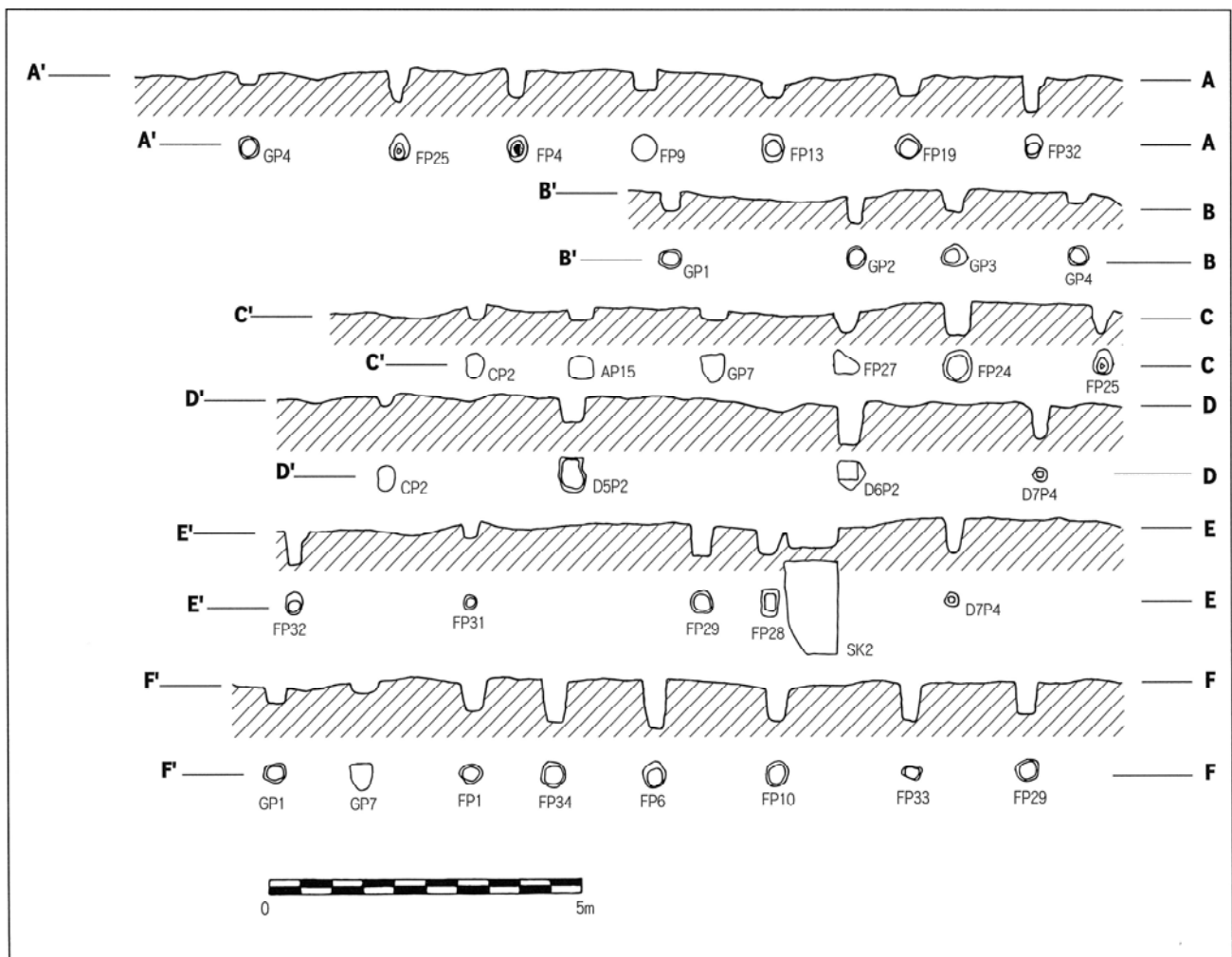
AトレンチとCトレンチの交点東北より良好な状態で配列がみられる掘立柱建物の柱穴群が検出されたので、東西に13.5メートル、南北に16メートルの216平方メートルの区域をセクションベルトを残し、全面精査を行った。第3図（P4参照）のF・G区、D4～7、Aトレンチの北側を含む範囲である。

D5グリッド及びCトレンチからCP2、D5P2、D6P2、D7P4などがほぼ直線的に並び、これが西側を画する柱列群である。東側はFP25、FP4、FP9、FP13、FP19、FP32がみごとにほぼ柱間210センチメートルの間隔で南北に並び東側を画する。そして北側は、D7P4、FP29、FP30、FP31、FP32が直線的に配置され、南側はCP2、AP15、FP27、FP24、FP25が配列される。従って、西側12.5メートル、東側11.7メートル、北側12.0メートル、南側12.0メートルで、桁行5間、梁間5間の建物があったことが想定される。ただ西の梁間より東の方が約80センチメートル少ない状態で、歪みが見られることが気がかりである。このような5間四方の建物は仏堂と思われる。南側を正面とした寺院本堂であろう（SB1）。

このような桁行5間、梁間5間の仏堂建築の例は、いま残る中世末期の建立と言われる山形市山寺立石寺の根本中堂や天童市若松観音堂などに見ることができる。

ただ寺屋敷の例は、基壇がなく礎石も用いられていない簡素な掘立柱の建物であった。柱穴は丸柱が基本で、掘方は50センチメートル前後のものが多く、確認面からの深さは30～60センチメートル程度で、柱穴底部に礎石を置いたり、岩盤をくり抜いたものもあった。径20センチメートル程度の円柱を組み合

第5図 寺屋敷主要部柱穴断面図



わせたもので、至って簡素な仏堂であり、縁やひさしも持たなかった。柱穴には補強の跡も見られるが、長い期間存続したとは考えがたい。内部にも柱があったようであるが、FP10, FP11, FP20, FP33は210センチメートルの7尺等間隔の正方形であり、ちょうど仏堂の北寄りの中心部に位置するので、この辺りに本尊を安置する須弥壇があって、それを囲む柱列であったと思われる。その中の方形ピットは、そこに付属する施設に伴うものであろう。

南側に5間×2間の外陣を想定したが、確証はない。内陣の一部は床張りが考えられるが、外陣は土間でよく整地され踏み固められていたようである。中世の密教寺院の様式による簡素な仏堂があったことが推定されるが、なお今後の検討が必要であろう。

以上SB1について述べたが、SB1の仏堂が廃絶か移転した後に、SB2の総柱による南北棟の倉庫様建物が設けられる。それは北東隅に入口があったらしく、その付近には柱がない。桁行6間、梁間3間で、14.5メートル×7.6メートルの南北棟である。柱穴がSB1と共通するところもあり、おそらく仏堂の廃絶後に、旧材を用いて建てられたものであり、柱間は210センチメートル、7尺等間隔を基本とする。多分左沢楯山城に付随する倉庫のような施設であろう。

SB1とSB2の前後関係は、明確には不明であるが、城郭の施設をとり壊して宗教施設を設けることは考えがたいので、寺が他へ移された後SB2が建てられたものと考えられる。なお柱穴の切合い関係からは明確に把握できなかった。

なお、Aトレンチ南側、D2～4グリッドからも柱穴が検出されている。おそらく本堂に伴う庫裏のような建物が考えられるが、この度の発掘区域では、柱穴群の配列の規則性は認められず、建物跡を復元するまでには至っていない。

おそらくこれらの建物群に至る道筋は、蛇沢に沿って南側から入る狭い道であったと推定される。

写真4 ①寺屋敷Fトレンチ遺構状況(北東側)



写真4 ②寺屋敷Fトレンチ遺構状況(南西側)



写真5 ①柱穴検出状況D6P1

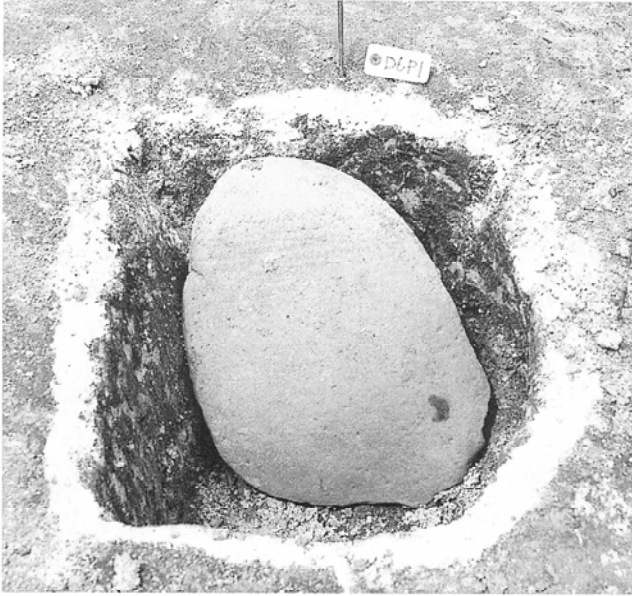


写真5 ②柱穴検出状況D7P4



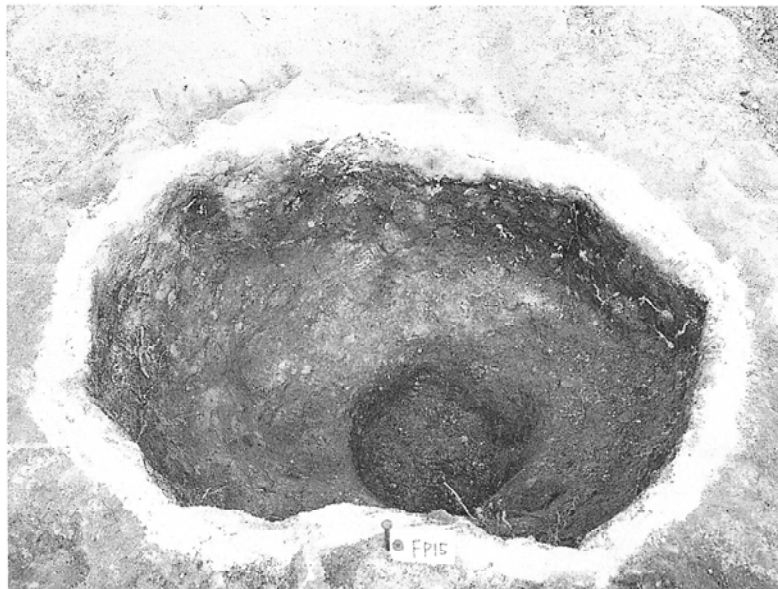
写真5 ③柱穴検出状況FP13



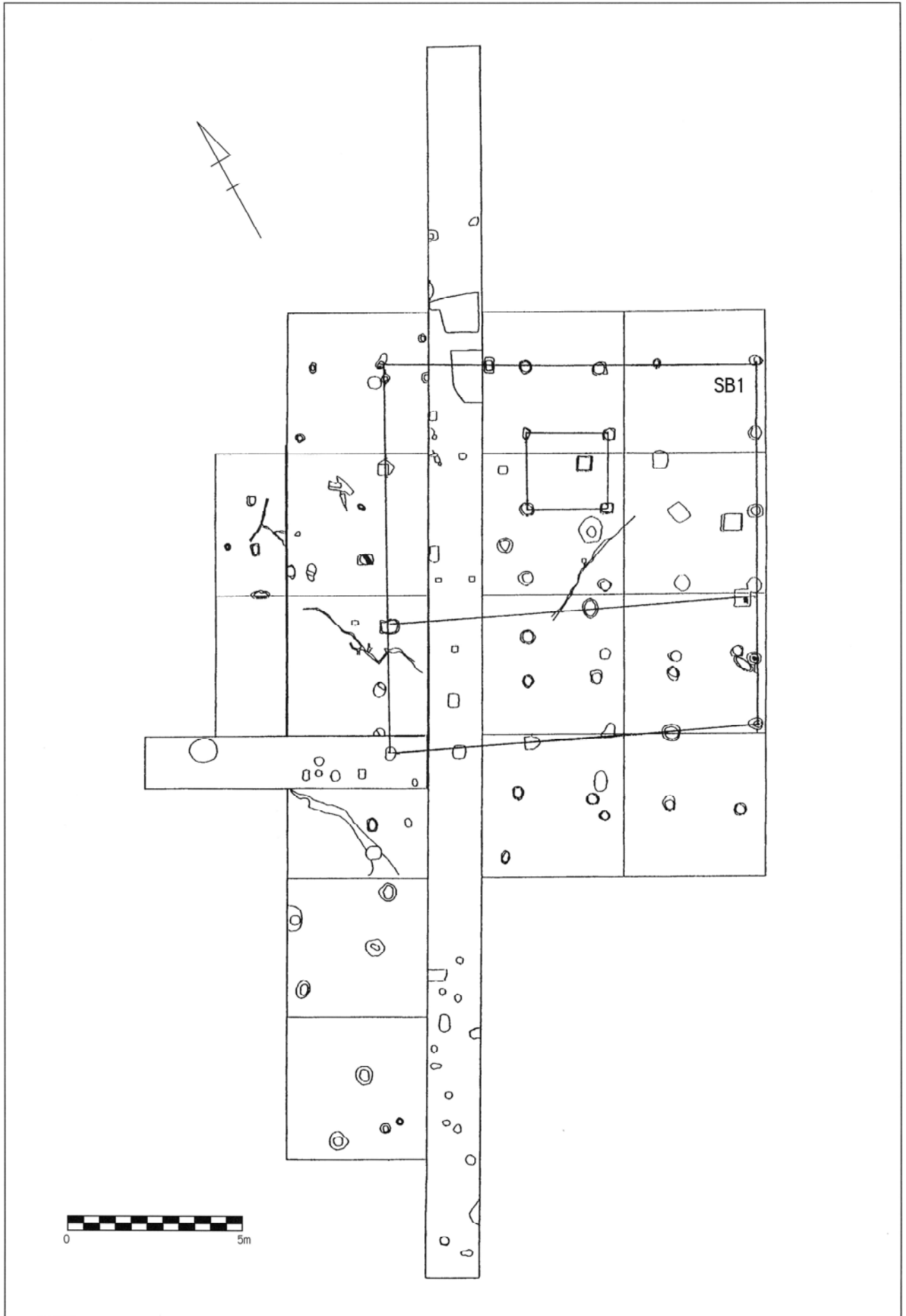
写真5 ⑤柱穴検出状況FP24



写真5 ④柱穴検出状況FP15



第6図 寺屋敷遺構配置平面図



第4節 出土遺物

これまでと同様に出土遺物はきわめて少なかった。建物跡の床面より出土したものはなく、ほとんどが埋め土から発見されたものである。

出土遺物29点の大部分は磁器の小破片である。他に鉄製角釘、目薬瓶、須恵器片があった。角釘は長さ5センチ、目薬瓶は明治期、須恵器片は表裏とも叩き目が認められる。卸目が認められ、かなりすりへった摺鉢片もあるが、これは近世のものであろう。

磁器片はほとんど近世後半のもので、染付けの施されているものが多く、伊万里系であると思われる。他に近世の磁器も若干認められる。

遺構の年代を示すような遺物や寺院跡であることを証する遺物はなかった。廃絶時にいずれかの場所に集中して投棄されたなど、徹底して清掃が行われたことを示している。

写真6 寺屋敷出土遺物

須恵器片①



須恵器片②



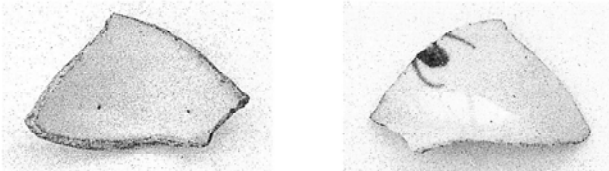
目薬瓶



鉄製角釘



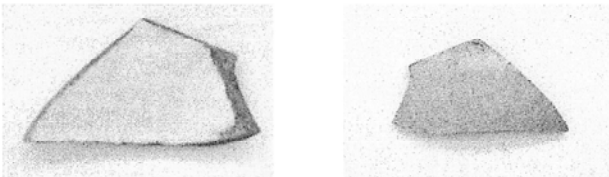
磁器片①



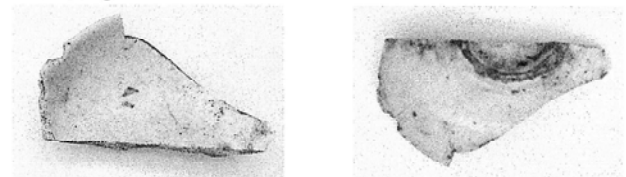
磁器片②



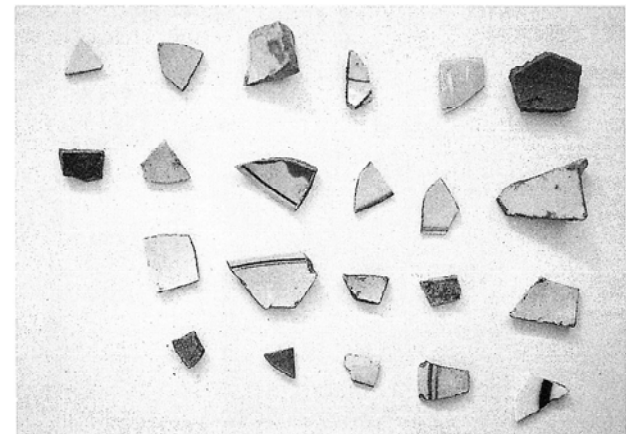
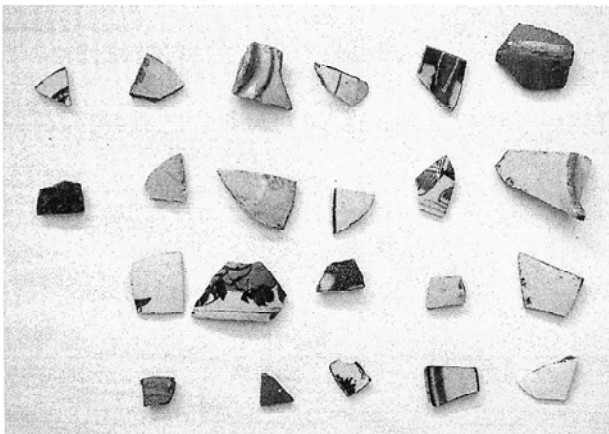
磁器片③



磁器片④



その他磁器小破片



第2章 元屋敷の試掘調査

第1節 遺跡の立地と環境

左沢元時により築城（正平年間－14世紀中頃）された、楯山の山塊が、南斜面で急崖となり、平地（河岸段丘）に接している。

楯山の麓には、傾斜の緩い土地が広がり、この地が元屋敷（P2第2図参照）である。この地形は、愛宕下から弁財天へと西方に続いている。現在は、畑や水田になり、住宅地が点在しており、この地に、中世左沢の集落があった。

しかし、現在は、鉄道の建設、国道工事等により、地形が大きく変化している。

中世においては、元屋敷から愛宕下にかけての山麓には、居館や家臣の住居、寺院などがあった。

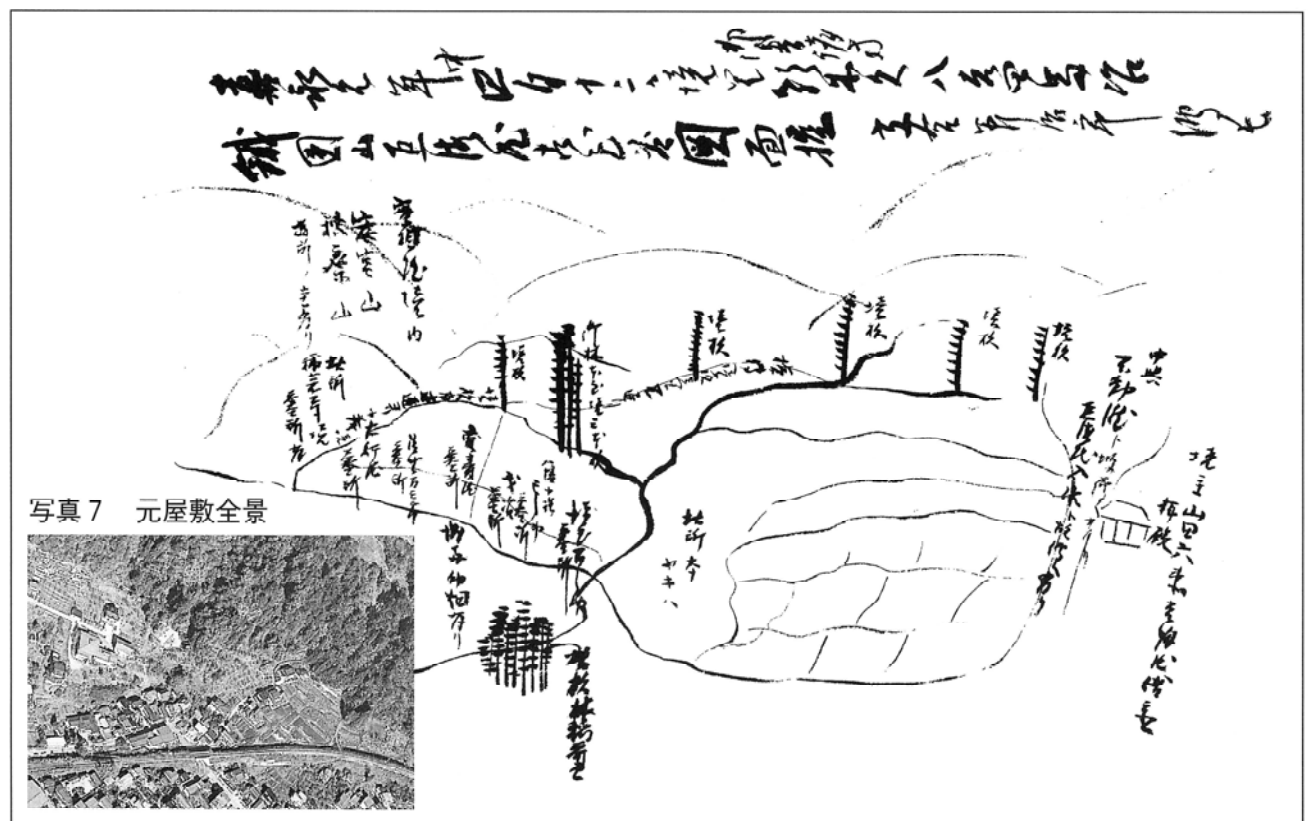
また、最上川に臨んだ所には、河岸があり、河川交通に従事した人々の住居があり、ここより少し西に入った平地には、町の人々の住居があった。

最上氏改易後の元和8年（1622）酒井直次が左沢領主になると、元屋敷にあった住居、約200戸が、新しくつくられた3つの町に引移っている。

第2節 調査方法と調査経緯

本年度の試掘は、元屋敷の東端部であり、この地の地形は、最上川が左沢で大きく右に曲流している。その川べり近くまで、楯山山塊が、急崖になって落ち込み、狭い平地になっている。波切不動尊の近くをA地区、そのやや西方をB地区とし、A地区には、Aトレンチ、B地区には、B、C、D、E、F、Gトレンチを設定し、試掘に入った。

第7図 『鉄囲山巨海院古屋敷図面控』



A地区

Aトレンチ (2メートル×4メートル)

B地区

Bトレンチ (2メートル×4メートル)

Cトレンチ (2メートル×7メートル)

Dトレンチ (2メートル×2メートル)

Eトレンチ (2メートル×2メートル)

Fトレンチ (2メートル×2メートル)

Gトレンチ (2メートル×2メートル)

第3節 試掘の結果

Aトレンチでは、表土より20センチメートルで地山（シルト層）に達し、湧き水がはげしく、遺構・遺物の確認ができなかった。

Bトレンチでは、深さ70センチメートルで地山に達し、表土中より磁器の小片3点が出土したが、遺構の確認ができなかった。

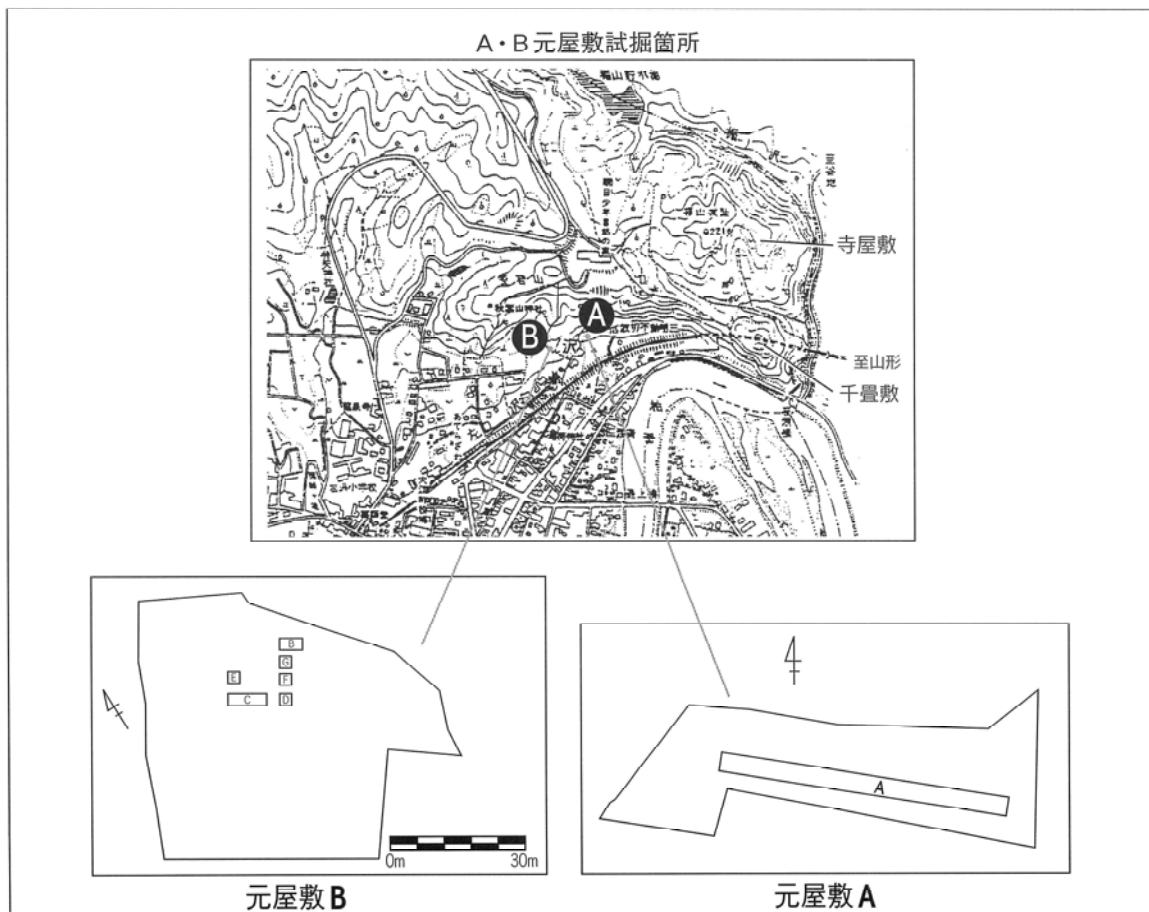
Cトレンチでは、20～30センチメートルで地山（シルト層）に達し、表土中より磁器小片5点が出土したが、柱穴等の遺構の確認ができなかった。

B、D、F、Gトレンチでは、20～70センチメートルで地山（シルト層）に達したことなどから、地山は平坦ではなく、段差、あるいは傾斜地になっていることが確認できた。

各トレンチにおいて、柱穴等の遺構の確認ができなかった。

また、表土中より出土した、磁器小片は、8点を数えるが、いずれも印判によるプリント染付けで、最近の新しい磁器片と考えられる。

第8図 元屋敷遺跡位置図及びトレンチ配置図



第3章 縄張図調査

第1節 B2地区（八幡平周辺）の縄張図

今年度は、昨年度までのB1地区の調査に関連し、左沢楯山城の「表側の顔」とも言えるB地区の全体像を見極めるため、4月および11月にB2地区の縄張り調査を行った。その結果、B2地区は最高所である主郭I区域、南東尾根上にのびる区域および主郭Iから土橋を経て北側に広がる区域の3つの区域から成り、各区域の構造および特徴については次の通り解明できた。

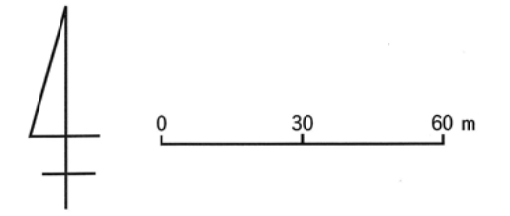
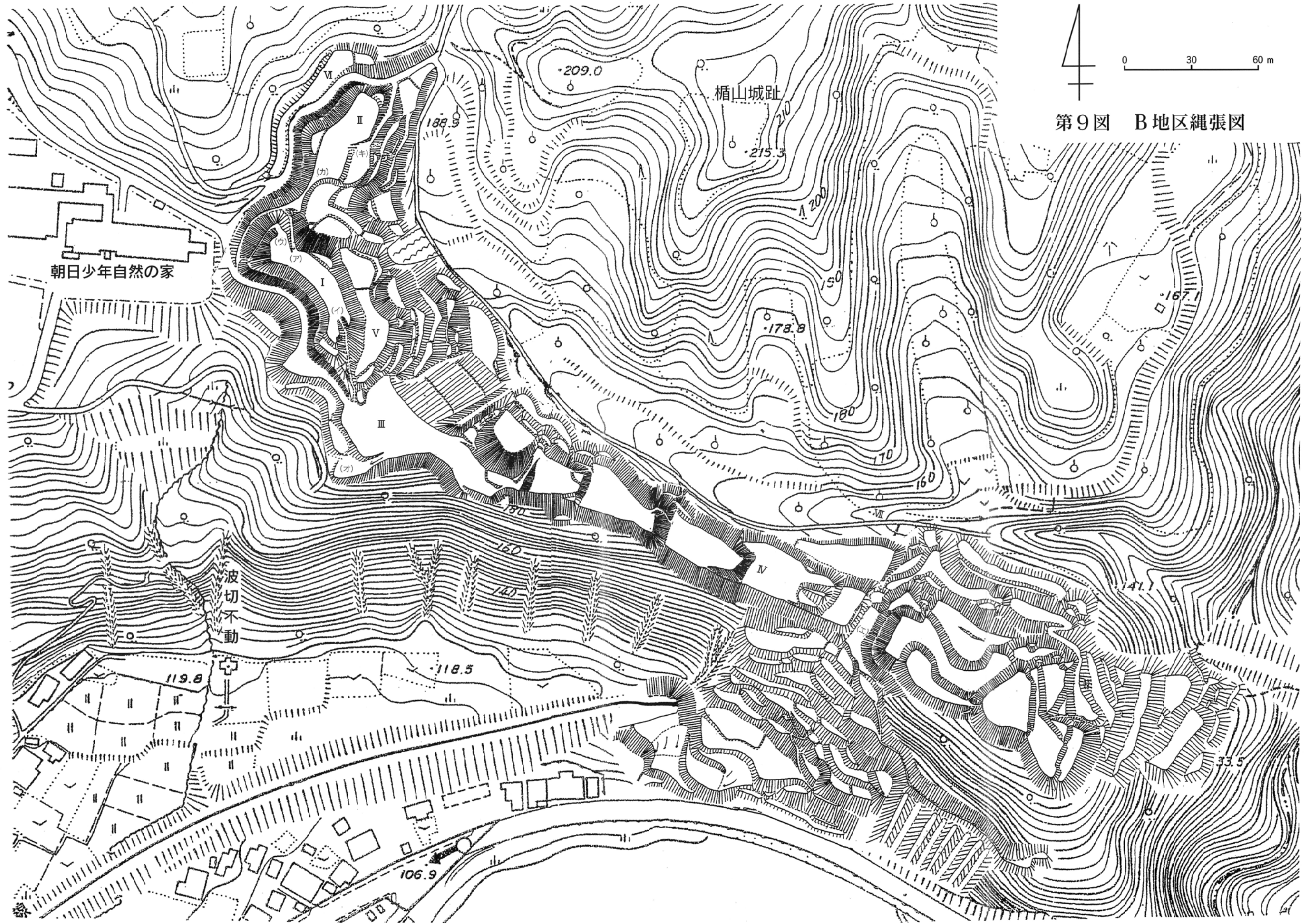
B2地区の核となるIの曲輪は、かつて寒河江から分霊した八幡宮が祭られ、八幡平と称されていた所である。50メートル×10メートルの彎曲した形状をしており、政治的・軍事的に主要な建造物を配置するには十分な広さとは言えないが、切岸はかなり急峻でしっかりしている。この地は宗教的な拠り所であるとともに、大手があったと推測される左沢楯山城西側からの侵攻を抑さえる上でも、また、本丸（八幡座周辺）へのルートを防備する上でも極めて重要な役割を果たしていたと考えられる。曲輪Iに至るには（ア）、（イ）、（ウ）からの道があるが、（ウ）の道は明らかに近年造られたものである。

（ア）は（カ）の土橋を経て北に広がる曲輪群からの虎口となっており、（イ）は公園造成に伴い整備の手が加わっているものの、南東の広大な曲輪Ⅲからのルートで腰曲輪を配置し防御を固めている。北東の谷側に向かっては、Vの曲輪を中心に3段ほどの腰曲輪が築かれており、曲輪Ⅱ区域とともに谷から登る敵に睨みを利かせている。

楯山公園の主要地として親しまれている曲輪Ⅲは、公園造成に伴い南東に傾斜整地されており、元は2段の曲輪から成っていたものと推測されるが、小屋掛けするには十分な面積を有している。その南西角には、麓の波切不動付近および朝日少年自然の家方面からのルートをおさえるために腰曲輪と虎口（オ）が備えられてある。曲輪Ⅲから南東に延びる尾根上には、ほぼ短辺20メートル×長辺40メートルの曲輪が4段配されており、それぞれの曲輪は3～5メートルほどの急峻な切岸で隔たれ、細い道で往来が許されている。さらにこの区域の最上川に面した南斜面には、豎堀や豎堀的な自然の沢が10数本確認された。これらの曲輪群は、箱堀（エ）から侵攻する敵が尾根上を進むのを防ぐため、およびB1地区との連絡をとるためのものと考えられる。また、下段の曲輪Ⅳには「鉄砲場」と呼ばれる土塁状の構築物があり、その名の通りであれば、蛇沢の谷から元屋敷に抜ける道を箱堀（エ）を中心におさえるための施設と思われる。しかし、土塁の向きおよび曲輪Ⅳへの道が南側にあることから、蛇沢から谷沿いに登る敵を意識して構築されているとも考えられ、蛇沢の道および寺屋敷といった一般に解放された地域と城内との境界（門）がⅦ付近にあった可能性が伺われる。

一方、主郭Iから土橋（カ）を経て北に広がる一帯は、蛇沢の鞍部を経てC地区（八幡座）とつながっており、左沢楯山城中心部との連絡を担っている区域である。小屋掛け可能な曲輪Ⅱを中心に備えられた、東側3段の帯曲輪、西側の60メートルにおよぶ帯曲輪Ⅵは、中心部に至る道をおさえるためのものである。北から曲輪Ⅱに至る虎口道（キ）は、果樹園として手が加わっているため当時のものか確認はできない。

以上、最上川から望む左沢楯山城の壮大な様相、および蛇沢谷道からの侵攻を意識した極めて堅固な城郭プランが確認された。今後の課題は、現在車道として整備されている道（網掛け）が当時から存在したのか調査を行い、想定する大手門、搦手門の位置からの登城ルートを解明することである。



第9図 B地区縄張図

第2節 C地区(寺屋敷周辺)の縄張図

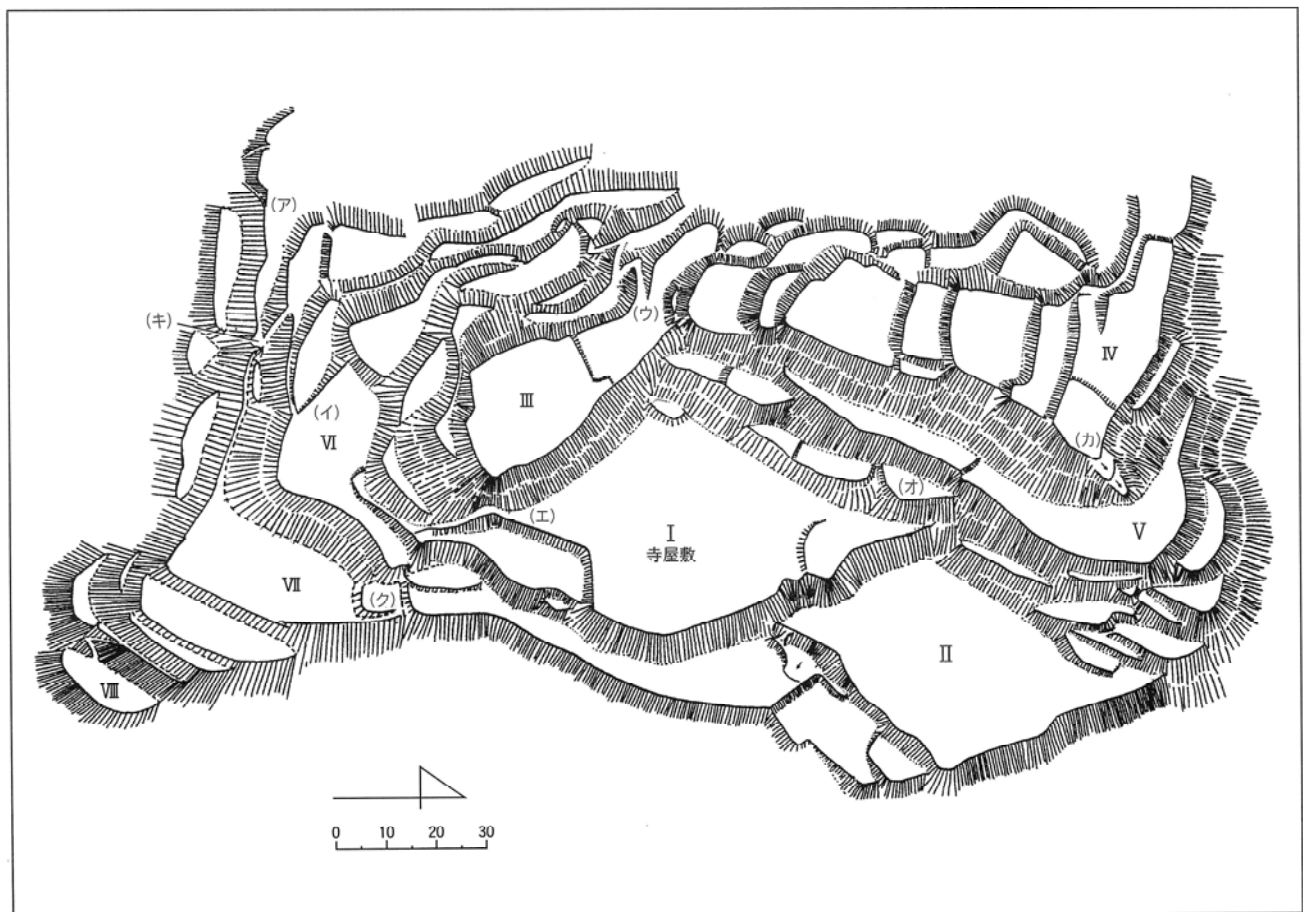
昨年度、矢竹群生のため未調査となっていたC地区西側の蛇沢沿い斜面について、矢竹の除去作業により追調査を行い、寺屋敷周辺の縄張が明確になった。

今回の調査で特筆すべきは、登り口(ア)から寺屋敷北東に広がる広大な曲輪Ⅱへ至るルートがはっきりしたことである。まず、(ア)から(イ)に登るはじめの屈曲(キ)より、細い道を東に進み曲輪Ⅶへと至る。曲輪Ⅶは数棟の建設が可能な広さを有しており、蛇沢の谷から侵攻する敵に備えた曲輪群の中心となるものである。そして曲輪Ⅶ北側の虎口(ク)より寺屋敷下の帯曲輪を経て、虎口の腰曲輪より曲輪Ⅱへと達していく。このルートを進む敵は、絶えず頭上の曲輪Ⅳおよび寺屋敷からの攻撃にさらされることになるのである。

曲輪Ⅶから南東方向は、やや大きめの曲輪から2段の帯曲輪を経て最下段の曲輪Ⅷへと至る。曲輪Ⅷから上段の帯曲輪への道は明瞭に残っているが、それより上に通じるルートは一部残った矢竹により確認できなかった。この曲輪群は、沢を挟んだB1地区とともに谷道を登る敵兵を挟撃するためのものである。また、(ア)から曲輪Ⅶに至るルートの下段にも腰曲輪が配置してあり、道をふさぐ意識の強さを示している。

さて、今年度の検討課題である寺屋敷に次ぐ広大な面積を有する曲輪Ⅱの存在理由については、当初なんらかの寺屋敷関連施設が存在したと考えていた。ところが今回の調査により、別のルートを持った、直接には寺屋敷と連絡を有さない曲輪である可能性の大きいことが判明した。しかし、軍事的に北東方面への防備のため用いられたのか、あるいは村人の避難所的に用いられたのか、それを解明するまでには至らなかった。今後の発掘調査等の成果を参考に考察すべきである。

第10図 C地区縄張図



第4章 成果と課題

第1節 今年度調査の成果

1. 発掘調査の成果

今年度は、寺屋敷部分と元屋敷部分の2カ所の発掘・試掘を実施した。

まず、寺屋敷部分については、昨年度と今年度と2カ年にわたる調査により、掘立て柱構造の5間×5間の建物、排水溝、それに近世の古伊万里片等が出土した。5間×5間の柱穴があり、本堂と本尊を安置する内陣と想定されよう。柱穴から少なくとも2度の改築が行われているようである。また柱穴からは材木は発見されず、移築されたとき、そっくり材木も運び去られたものと考えられよう。5間×5間の建物については、柴橋の落衣にあった巨海院を、左沢元時の代に左沢楯山城内に移築したとされているところから（『巨海院由緒』・『宗古録』）、巨海院の一部である可能性も十分考えられよう。「寺屋敷」という地名とも符合することになる。ただし、出土遺物が少なく年代比定が難しく、柱穴を結んだ線にも歪みがあって検討する余地は大きい、国人領主の一支族の祈願寺の例として貴重な成果である。

次に元屋敷の発掘については、大きくは2カ所（1カ所については、数カ所）試掘した結果として遺構・遺物を発見することができなかった。「元屋敷」という地名から、領主の居館それに河岸の町並や、城内に移築された巨海院に対して城外に置かれたという実相院跡・称念寺跡など（『大江町史』1948年）に関係する遺構・遺物が発見されることが期待されていたのであるが残念な結果になってしまった。嘉永元年（1848）に作成された『鉄厩山巨海院古屋敷図面控』（P12第7図参照）を参照すると、「慶寿院墓所」「大行院墓所」などの下部にあった畠部分等を発掘した可能性が高い。しかし、左沢楯山城全体でいえば、元屋敷は中核部分であり、今後の発掘する場所が逆に明確になったともいえよう。

2. 縄張調査の成果

今年度は、B2地区の南側斜面と北側の八幡平、それに蛇沢を挟んだC地区とB1地区の両側について調査を実施した。

B2地区南側斜面では、JR左沢線トンネル入口付近から東屋を経て朝日少年自然の家付近まで調査を行ったのであるが、6本の竖堀と自然の沢数本を確認できた。これはB1地区南側の4本の竖堀から連続するものであり、自然の沢も天然の竖堀の役割を果たしていると考えられるので、B地区（B1とB2からなる）の南側斜面にはこれまでに20本近い竖堀を見つけたことになろう。船でやってきて最上川方面から見ると、左沢楯山城の南斜面には幾条もの竖堀が刻まれ、険峻で堅固な山城が目焼き付いたにちがいない。

蛇沢を挟んだB2とC両地区斜面では、桧木沢を越えて蛇沢に入りこんできた敵に対して、厳しい攻撃と防御がなされるように小さい曲輪群が築かれている。B2北側の八幡平の曲輪とそれに直行するように築かれた曲輪は蛇沢を登ってきた敵を最終的に食い止める防御線となっている。八幡平は蛇沢方面ばかりではなく、朝日少年自然の家方面からの敵を主郭である八幡座方面へ登らせないための重要な曲輪となっていることが理解される。

第2節 次年度以降調査の課題

1. 発掘調査の課題

まず寺屋敷部分について、2カ年にわたって調査を実施したのではあるが、もっと調査面積を拡大してその全貌を明らかにしていく課題が残されている。この寺屋敷と称される曲輪の上に位置する曲輪や下に位置する曲輪も面積が広く、是非調査すべき曲輪である。続いて左沢楯山城の主郭である八幡座の北側の曲輪の調査である。主郭の北側下部の曲輪については発掘がなされ、柵列や城門と考えられる遺構がみつかったはいるのであるが、主郭については調査の手の届いていない。主郭に遺構があったのか解明する必要がある。次には元屋敷、愛宕下などの部分の調査である。前述のように元屋敷には、領主の居館や河岸の町並、寺の遺構があったと思われ、是非調査しなくてはならない部分である。また、居館もある時期に移動した可能性も考えられ、移動した場合、移動した地区として最も可能性の高い愛宕下部分も発掘調査を実施しなくてはならないだろう。これらの地域は遺物出土も期待されている所である。

2. 縄張調査の課題

空中写真を利用した測量図の作成が次年度実施される予定である。その成果を活用して左沢楯山城全体の縄張図を完成させることが最大の課題であることは言うまでもなからう。

しかし、当面の課題としては、B1地区南斜面のうち笹竹が生い茂って調査できなかった部分については、次年度に笹竹の伐採を行う予定なので、この部分の調査は完了できるものと思われる。続いて、B2地区の南斜面の調査の続行が必要である。この部分の調査が完了すると、左沢楯山城のいわゆる「表の顔」の部分の部分が明らかになる。

以上、今年度の発掘調査と縄張調査の成果と課題を述べてきた。しかし、引き続き文献史料・古絵図・地籍図などの資料収集や（この点で、『大江町史資料（絵図・地図）』第14号〈1993年〉の発行は大きなよりどころとなろう。）、町民の方々や研究者等によるシンポジウム・研究討論・講演等によって、一層調査研究は進展していくものであることを心に刻まなくてはならない。そして何よりも地域住民の方々の深いご理解とご支援があってこそ成り立つ調査であることを明記しなくてはならないであろう。

写真8 寺屋敷発掘調査状況



報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょういせき
書名	左沢楯山城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
著者名	鈴木 勲、川崎 利夫、犬飼安太郎、大場 雅之、伊藤 清郎
編集機関	大江町教育委員会
所在地	〒990-1163 山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1 ☎0237-62-3666
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あてらざわたてやまじょう 左沢楯山城	やまがたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡	324	324-	38度	140度	1999. 8. 9	320m ²	学術調査
てらやしき 寺屋敷	おおえまちおおあざあてらざわあざたてやま 大江町大字左沢字楯山		001	23分 05秒	13分 00秒	1999. 9. 6		
もとやしき 元屋敷	やまがたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡	324	324-	38度	140度	1999. 10. 29	100m ²	学術調査
	おおえまちおおあざあてらざわあざたてやま 大江町大字左沢字楯山		001	22分 30秒	12分 09秒	1999. 11. 8		

大江町埋蔵文化財調査報告書 第3集

山形県西村山郡大江町
左沢楯山城遺跡調査報告書

発行日 平成12年（2000年）3月

編集 大江町教育委員会

発行 山形県西村山郡大江町大字左沢882の1

印刷 株式会社 若月印刷
山形県西村山郡大江町大字左沢105